コラム：吉田公平先生
（東洋大学名誉教授）

啓蒙思想家としての中江藤樹

啓蒙とは「無知蒙昧を啓（ひらく）」という意味である。啓の啓発・開発・解放のことである。だから啓蒙思想家とはその時代の人々が、旧来の考え方や生き方が、もはや意義を失っているのに、そのことに気が就かずに、惰性的にこれまでの生き方や考え方を、盲目的に信奉して、時代状況の変化から置き去りにされてしまうことにとりわけ危惧を覚え、折角に人として命を戴いたのに、其の意義を生かすこと無く、無意味な生涯に生きてしまうことになる。そのことを、自分の生き方として承知することができなくて、もがき苦しんで、遂に光明を見出し、それを同時代者たちに、訴えることになった。その一人が中江藤樹であった。時代が変わり社会状況が変わった。青天の霹靂であった。一つは戦国時代から国内戦争の無い時代になった。この場合の「国内」とは今日風な国内である。日本国内である。中江藤樹の時代の国内とは各藩内のことである。各藩における争いは主導権を争う権力闘争であって、他藩との戦争ではない。他藩との争いのことを戦国時代という。江戸時代になってその他藩という他国との戦争は無くなった。但し、江戸時代の国内戦争が文字通りに無くなるのは一六三八年の島原の乱ののちである。武器は鉄砲・槍・刀であった。人を殺すことが名誉ではなくなり栄達の手段では無くなった。平穏な日常の生活のなかで自力でいかに生きるか、が「第一義」となった。啓蒙を促したもう一つの要因は、十六・十七世紀は大航海が地球規模で通常化した時代に突入した時代であったことである。東シナ海の領域で小航海をくりかえしていた時代とは様変わりした。戦国時代が終わりを告げたのは、大航海時代にいかに対処するかが、最大の関門であった。国際貿易を展開して巨利を獲得すること、万物を創造し最後の審判を下すという、他力信仰のキリスト教にいかに対処するか。国際環境の真っ只中に引き連れ込まれた「日本」はいかに対処するか。織田信長・豊臣秀吉・徳川家康は対応策は歴然と異なる。その激変の中で中江藤樹は救いの道を模索した。それが朱子学・陽明学・藤樹学という軌跡を撮らせることになった。浄土宗、浄土真宗、禅宗、神道の世界では、「安心」を得られないと覚悟して、自力で自己の本性を発揮して「悪」の世界に陥落することを回避できると確信して、門人達と真摯に学んだのである。啓蒙思想家の典型である。

吉田公平先生のご紹介

【経歴】
東北大学文学部・大学院　中国学専攻。九州大学助手、東北大学助教授、広島大学教授を歴任。東洋大学文学部教授、東洋大学名誉教授（現在に至る）。現在、東京で、「心の学び　吉田塾」を月一回開催。

【専門分野および研究テーマ】
中国哲学、日本思想史。最近は、江戸時代、明治・大正時代の心学・陽明学の研究が主題。

【所属学会】
日本中国学会、日本思想史学会、東北中国学会、白山中国学会、東洋古典学研究会

【主要著書・論文】
①『陸象山と王陽明』（研文出版）、
②『陽明学が問いかけるもの』（同上）、
③『日本における陽明学』（ぺりかん社）、
④『中江藤樹心学派全集』（研文出版）、
⑤『中江藤樹の心学と会津・喜多方』（同上）、他多数。

ひじりの声

上田　藤市郎

ロシアとウクライナの戦争に加えてイスラエルとパレスチナの紛争が再燃し、国際情勢は解決困難な課題をかかえている。他方、わが国では、政治への信頼は地に落ち、度重なる自然災害によって、家屋や仕事場を失い途方に暮れている人々がいる。莫大な資産をほしいままにする人々がいる一方で日々の生計を維持するのがやっとという家族がある。

総じて言えることは、国家にしても個人にしても、それぞれの主義主張や欲望がむき出しのままでぶつかり合い、相互理解や共感する接点が見つけられない状況が続いているように思われる。とりわけ国の内外を問わず、未来に希望の兆しが見えないことである。戦争の惨禍や貧困の中にあっても、少なくとも明日は今日よりもよくなるという期待がもてれば、人は生きる勇気が湧きおこり、力がみなぎってくるものだ。

近年、私たちは先の見えない不安に備えて、防御の姿勢が際立ってきている。防災、政治、経済、文化のあらゆる分野にその影響が見られる。今、必要なものは、高齢者、成人、若者、子供たちすべての世代が、それぞれの夢をもつことだと思う。形は問わない。夢の実現に向けて一歩踏み出せば、それが大きなエネルギーになる。今回は、一旦、学びを離れて、夢の実現を「ひじりの声」とした。